平成 20、21 年度
中期目標の達成状況報告書
（別添資料）

平成２２年６月

鹿屋体育大学

目　　次

資料 1-1　・・・・・・・・・・・・１
資料 1-2　・・・・・・・・・・・・２
資料 1-3　・・・・・・・・・・・・３
資料 1-4　・・・・・・・・・・・・４
資料 1-5　・・・・・・・・・・・・５
資料 1-6-1　・・・・・・・・・・・・６
資料 1-6-2　・・・・・・・・・・・・６
資料 1-6-3　・・・・・・・・・・・・６
資料 2-1　・・・・・・・・・・・・７
資料 2-2　・・・・・・・・・・・・１０
資料 2-3-1　・・・・・・・・・・・・１０
資料 2-3-2　・・・・・・・・・・・・１１
資料 3-1　・・・・・・・・・・・・１２
資料 3-2-1　・・・・・・・・・・・・１３
資料 3-2-2　・・・・・・・・・・・・１３
資料 3-2-3　・・・・・・・・・・・・１３

資料 1-1

平成 21 年体育学部シラバスより

授業科目名	SCO－OP実習	授業形態	実　習	授業科目区分	キャリア形成科目（学外実習科目）
担当教員名	川西正志・北村尚浩・岩木龍ほ		補助担当者名		
単位数	4　単位	履修年次	3、4年次	受け入れ人数	5－6名程度
授業の目標及び期待される学習効果	生涯スポーツビジネス現場でのマネジメントや指導について実習を通して実践的な指導能力を学習する。 実際の民間スポーツクラブ産業、研究所、スポーツ振興財団、用品業、公共施設等の生涯スポーツビジネス現場の具体的な理論とマネジメント指導の学習効果が期待される。				
テキスト・教材参考書	随時、資料を提供する。				
成績評価の方法	□学期末試験の成績（　　%）　☑出席状況（７０%）　☑授業への取組み状況（１０%） ☑レポート等の提出状況（２０%）を総合的に評価する。				
成績評価の基準	（具体的に記入） 分野別のレポートと出席状況、質疑応答を中心とした取り組み状況から総合的に評価する。				
他に履修しておくことが望ましい科目	スポーツ・レジャーマネジメント論、生涯スポーツ指導実習、その他同等の学外スポーツ指導実習を履修していること				
備考	実習日誌と手引きにもとづいて 課題レポートが複数回要求される。				
オフィス・アワー	随時：川西（生涯スポーツ実践センター及び６０５研究室）北村（６０８研究室）				

授業計画

回	担当教員名	授業内容 集中実習科目として春季休暇中４週間（実働２０日間）の現場での実習を実施する。	授業時間外の指導等 （予習、復習、レポート等課題の指示）
1	川西・北村 岩木	民間スポーツクラブ産業・研究所、スポーツ振興財団、用品業、公共施設での事前事後指導及びSCO-OP実習参加	事前事後レポート
2	〃		
3	〃		

資料 1-2
本学ホームページより

「北京オリンピック報告会」を開催しました。

2008年10月7日

10月7日、鹿屋体育大学では競技力向上委員会主催の「北京オリンピック報告会」を開催し、競泳の柴田亜衣選手(修士課程2年)、高鍋絵美選手(H19年度卒)、高桑健選手(自衛隊、H18年度卒)がオリンピック出場の感想を語りました。(バレーボールの津曲勝利選手(サントリー、H9年度卒)は都合により欠席)

会では、福永哲夫学長が「4年に1回しか開催されないオリンピックに、日本代表として本学から4名もの選手が出場できたことは、とても素晴らしいこと。4年後に、会場の皆さんの中からオリンピック代表選手が現れることを期待します。」と挨拶。

引き続き行われたトークショーで、柴田選手は「代表になれたことが嬉しくて、絶好調のままオリンピックを迎えることが出来た前回のアテネの時とは、全く違うオリンピックだった。今回は故障でなかなか練習が出来ず、スタート台に立つと不安がいっぱいで、泳ぐのが怖かった時期もあったが、自分の持てる力を出し切ったと思うし、帰って来て、皆さんに『よく頑張ったね』と言ってもらい、最後まで泳ぎ切って良かったと思った」、高鍋選手は「予選は緊張しなかったが、決勝に出て、スタンドに日の丸を持った人を見て、初めて自分がオリンピックに出場していることを認識出来て感動した。オリンピック出場という目標があったから、1年間辛い練習にも踏ん張って来られた」、高桑選手は「柴田さんのアテネ金メダルに刺激を受け、練習を頑張ろうと思った。北京でも、練習中や試合会場で、鹿屋体育大学の先輩・後輩に支えられたオリンピックだった」と話しました。

資料 1-3
本学ホームページに掲載している内容

鹿屋体育大学大学院体育学研究科（修士課程）入試制度の一部変更について

平成２３年度入学試験から、１に記載する免除要件に該当する者に対しては、鹿屋体育大学大学院体育学研究科（修士課程）一般入試、社会人入試、外国人留学生入試において課す外国語（英語）試験を免除します。

１．外国語（英語）試験の免除要件

（１）大学院体育学研究科（修士課程）入試実施日から過去２年以内に TOEFL 又は TOEIC の公開テストを受験し、そのスコアが次の①～③のいずれかの成績に該当する者。

① TOEIC　７３０点以上の者
② TOEFL-PBT　５５０点以上の者
③ TOEFL-iBT　８０点以上の者
※ TOEIC－IP、TOEFL－ITP 等の団体特別受験制度によるスコアシートは利用できません。

（２）実用英語技能検定（日本英語検定協会）準１級以上の資格取得者

２．出願時に必要な証明書

英語試験免除を希望される方は、TOEIC は公式認定証、TOEFL は受験者控えスコア票（写真付き）、実用英語技能検定は合格証書又は合格証明書を提出してください。詳細については，平成２２年８月頃公表予定の募集要項で確認願います。

参考

TOEIC®　(Test of English for International Communications）については、http://www.toeic.or.jp/　をご覧ください。

TOEFL®　（Test of English as a Foreign Language）については、http://www.cieej.or.jp/toefl/index.html　をご覧ください。

資料 1-4
本学ホームページより

鹿屋体育大学東京サテライトキャンパス開所式、入学式を挙行

2009年10月13日

鹿屋体育大学では社会人教育(リカレント教育、キャリアアップ教育)に対するニーズが高い首都圏に社会人を対象とするコースを設置し、その拠点として文京区本郷に所在するSWT(サンウエイテクノロジー)ビル五階に東京サテライトキャンパスを開設し、大学院体育学研究科修士課程の社会人学生三名を受入れました。

十月三日に挙行された入学式では、東京サテライトキャンパスでの受入学生として一期生となる学生全員が出席し、学長の告示の後、新入生を代表し、元バレーボールアメリカ代表選手のヨーコ ゼッターランド氏が宣誓を行い学生としての使命を誓いました。

続いて行われた開所式には文部科学省関係者、企業関係者及び同大同窓会関係者ら約五十名が出席しました。福永学長が挨拶に続き貯筋運動に関する講演を行い、その模様は授業等で使用するテレビ会議システムを通じ鹿児島県にある同大の講義室で聴講している学生達にも伝えられました。その後、懇談会では文部科学省スポーツ・青少年局坂元生涯スポーツ課長の挨拶に続き学長の乾杯の発声で和やかな雰囲気のうち歓談が行われました。

開所式は盛会のうちに終了し、東京サテライトキャンパスは新たな東京地区における鹿屋体大の拠点としての機能をスタートさせました。

ヨーコ ゼッターランド氏による入学生宣誓

開所式で挨拶を行う福永学長

資料 1-5
本学ホームページより

第6回日本e-Learning大賞　文部科学大臣賞を受賞！！

2009年8月7日

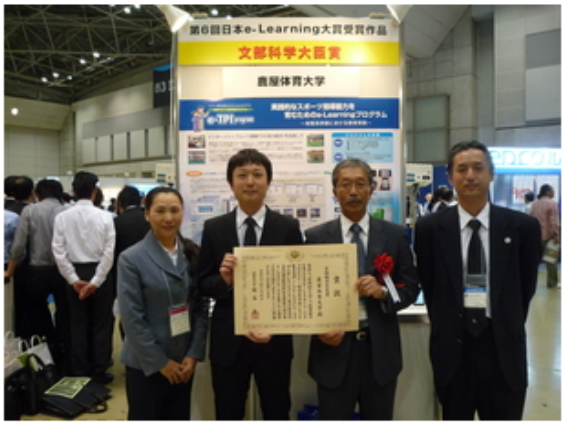
鹿屋体育大学で取り組んできたe-Learningを活用した学外スポーツ指導実習支援の取組が、第6回日本e-Learning大賞（主催：e－Learning　WORLD　2009実行委員会、フジサンケイビジネスアイ）の文部科学大臣賞を受賞しました。

これは、平成18年度から現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）採択事業として取り組んできた「実践的スポーツ指導者教育プログラム」の成果が高く評価されたものです。
この賞は、新しいe-Learningの可能性を例証し、e-Learningの健全な発展を支援するために設立されたもので、6回目となる今年は、企業や大学等93件の応募の中から本学が栄えある文部科学大臣賞を受賞することとなりました。

受賞理由として、「①“実践的スポーツ指導者”養成の柱となる『学外スポーツ指導実習』を推進する包括的なインターン活動支援プログラムをe-Learningの特徴を活かして開発したこと。②運動生理学等の理論や実技・実習、実習マナー等をコンテンツ化したこと。③学生がモバイル端末（iPod　touch）で随時学習・参照できるほか、電子実習日誌により情報を集約するなど、教育プログラム全体を全国の体育施設やスポーツクラブの協力も得て体系化したこと」が挙げられました。

本学をはじめ、今回の受賞企業等6社の表彰式は、8月5日から7日まで東京ビッグサイトで開催された「e-Learning　WORLD　2009　Expo & Conference」会場にて行われ、プレゼンテーションと本取組の展示・紹介を行いました。

文部科学大臣賞を授与される松下副学長



授賞式に参加の関係者一同

資料 1-6-1
電子ジャーナルへの切換状況（2010 年 1 月）

	2009年図書館購入冊子	2010 年電子ジャーナル購入		2009年図書館購入冊子	2010 年電子ジャーナル購入
1	Acta physiologica (Acta Physiologica Scandinavica)	○	15	Journal of biomechanics	○
2	American journal of physiology	○	16	The journal of histochemistry and cytochemistry	○
3	The American journal of sports medicine	○	17	Journal of marketing research	○
4	British journal of sports medicine	○	18	Journal of orthopaedic and sports physical therapy	○
5	Calcified Tissue International	○	19	The Journal of physiology	○
6	The Gerontologist	○	20	Journal of sport & exercise psychology	○
7	(The journals of gerontology. Series A)	○	21	Journal of sport and social issues	○
8	(The journals of gerontology. Series B)	○	22	Journal of sports medicine and physical fitness	○
9	International journal of physical education	冊子	23	Journal of sports sciences	○
10	International journal of sport psychology	冊子	24	Leisure sciences	○
11	International journal of sports medicine	○	25	Leisure, Recreation & Tourism Abstracts	冊子
12	International review for the sociology of sport	○	26	Newsweek	冊子
13	Japanese Psychological Research	○	27	Research quarterly for exercise and sport	○
14	The journal of biological chemistry	○	28	Sociology of sport journal	○

資料 1-6-2
電子ジャーナル講読タイトル数

コレクション名	出版社	タイトル数
Science Direct. Subject Collection.	Elsevier	1,044
Inter Science. STM Collection.	Wiley	757
Springer LINK.	Springer	1,650
SPORTDiscus with full text.	EBSCO	400
その他	Sage ほか	17
計		3,868

資料 1-6-3
鹿屋体育大学学術情報リポジトリ

年間ダウンロード件数
2008 年 4 月～2009 年 3 月 3,078 件、2009 年 4 月～2010 年 3 月 5,829 件

資料 2-1

目指すべき研究の方向性及び大学として重点的に取り組む領域。

1．スポーツにおける競技力の向上を図るために、身体発達に応ずる運動適応のメカニズムを明らかにし、科学的なトレーニング法の構築と高度の指導システムの開発を、国際的視野に立って推進。
2．スポーツによる健康づくりの原則を明らかにし、人々のライフステージや体力、生活環境に応じた運動処方を開発し、アクティブライフスタイルの形成と生涯スポーツの振興に積極的に寄与。
3．発育期の青少年の心身の健全な発達に資する一貫指導システムの研究・開発を行うとともに、指導者の確保と施設の整備を含めた学校体育の充実への寄与。

1．科学的トレーニング法の構築として、国際大会等に出場経験のある一流競泳選手を被験者に、競技力向上を目指した低圧環境下におけるスプリントトレーニングの開発を行い、無酸素性エネルギー供給能力および最大推進パワーの向上に有効であることを解明した。さらに「高所トレーニングのこれまでとこれから」(山本,トレーニング科学，21(3),pp.339-356,2010)の研究では、常圧環境下で生活し低圧環境でトレーニングする期間(Low Life-High Training)を経て常圧環境(Low Life-Low Training)で記録を伸ばす、LL-HT と LL-LT を繰り返すことにより競技力向上を図る複合トレーニング型の運動処方プログラムが確立されつつある。また、「女子自由形オリンピック候補選手における力学的特性の研究」や「国際競技力向上を目指した一流競泳選手における医科学的研究」を行い身体発達に応じた運動適応のメカニズムを明らかにした。

【関連する研究成果】

1)「低圧環境下における持続的・間欠的スプリント運動時の代謝特性」（荻田，田中，田口，日本体育学会第 59 回大会，2009）
2)「低圧環境下における競泳スプリントトレーニングの効果」（小澤，西脇，黄，黒部，田中，田口，荻田，第 22 回日本トレーニング科学会大会，2009）
3)「High-altitude training for athletes and exercise therapy.」（Ogita,F.，11th Asian Federation of Sports Medicine in Tehran，2008）
4)「競泳スプリントトレーニングが水泳運動中のエネルギー供給能力に及ぼす影響」（荻田，田中，田口，日本体育学会第 59 回大会，2008）
5)「女子自由形一流選手における力学的特性」（荻田，黄，田中，田口，2008 年日本水泳・水中運動学会年次大会，2008）
6)「女子一流選手競泳選手における推進効率と各泳距離のパフォーマンスとの関係」（黄，田中，田口，荻田，2009 年日本水泳・水中運動学会年次大会，2009）
7)「Effects of exercise training at different hypobaric hypoxic conditions on cardiovascular adaptations.」（Ogita,F., M.Nishiwaki, R.Kawakami, H.Tamaki, T.Tanaka, K.Saito，13th Annual Congress of European College of Sport Science，2008）
8)「Effects of intermittent hypobaric hypoxic exercise on circulatory responses during moderate exercise and vasodilative function.」（Ogita,F., M.Nishiwaki, R.Kawakami, H.Tamaki, K.Saito，11th Asian Federation of Sports Medicine in Tehran，2008）
9)「Effects of hypobaric hypoxic training on the adaptation for cardiovascular function.」（Ogita,F.，The 12th International Symposium on Altitude Training 2008 Tokyo，2008）
10)「低酸素環境下におけるレジスタンストレーニングが血圧およびカテコールアミンに与える影響」（黒部，黄，小澤，西脇，荻田，第 22 回日本トレーニング科学会大会，2009）
11)「異なる低圧低酸素環境下での水中運動が糖処理能力に及ぼす影響」（西脇，黄，黒部，荻田，第 21 回日本トレーニング科学会大会，2008）
12)「準高所環境での有酸素運動がエネルギー代謝に及ぼす影響」（片山敬章，後藤一成，石田浩司，荻田太，第 64 回日本体力医学会大会，2009）
13)「Substrate utilization during exercise and recovery at moderate altitude.」（Katayama,K., K.Goto, K.Ishida, F.Ogita，Metabolism，Available online，2009）
14)「Effects of high-altitude training and the possible mechanism.」（Ogita,F，The 11th International Symposium on Altitude Training 2007 in Gero-Ontake Proceedings, pp.38-44,2008）
15)「エンデュアランストレーニングのこれまでとこれから　−最大酸素摂取量−」（荻田，トレーニング科学，21，pp.109-124，2009）
16)「Effects of maximal exercise on oxydative stress and the blood filtration time in athletes.」（Nagashima,M., K.Saito, F.Ogita.，50th ICHPER/SD Anniversary World Congress 2008，2008）
17)「心拍数の長期記録による中距離走トレーニング法の改善」（李，松村，福永，藤田，西薗，スポーツトレーニング科学，11，pp.15-, 2010.3）
18)「Visual Analog Scale 法を用いたスポーツ選手の体調確認・管理の活用事例−陸上競技女子長距離選手を対象として一」（松村，金高，瓜田，鹿屋体育大学学術研究紀要，38，pp.77-85，2009）

19)「400m 走を模した 50 秒間のペダリング運動における効果的なペース配分」（山本，金高，松村，井上，桃原，陸上競技研究，76，pp.20-24，2009）

２．人々のライフステージや体力、生活環境に応じた運動処方の開発については、「低酸素環境への生体適応理論に基づいたメタボリック症候群改善のための新たな運動処方」の研究により、メタボリックシンドロームの危険因子に対して至適な低酸素環境レベル、効果出現期間を見極め、体脂肪率、内臓脂肪の減少、糖処理能、血圧や血管弾力性についても改善されることを解明した。この研究により、21 年度の日本体力医学会の学会賞（大塚スポーツ医・科学賞）を受賞した。

【関連する研究成果】

1)「異なる低圧環境下における短期間のトレーニングが糖処理能、血中脂質、体脂肪に与える影響」（荻田,黒部,西脇,田巻,浜岡，第 64 回日本体力医学会大会,2009)

2)「高齢者における体力の加齢変化と日常の身体活動の変化との関係−横断的研究から−」（恒吉，永山，涌井，濱岡，齊藤，前田，図子，井上，荻田，吉武，第 63 回日本体力医学会大会，2008）

3) 「Relationship between blood pressure and atmospheric pressure in the Japanese elderly.」（Onodera,S., T.Shiromoto, H.Shiromoto, K.Nishimura, K.Seki, A.Yoshioka, T.Takahara, F.Ogita，XXXVI International Congress of Physiological Sciences，2009）

4)「Effects of intermittent hypobaric hypoxic exercise on cardiovascular responses during moderate exercise in post menopausal women.」（Ogita,F., M.Nishiwaki, R.Kawakami, H.Tamaki, T.Tanaka, H.Hamaoka，14th European College of Sports Science，2009)

5)「低酸素環境下におけるレジスタンストレーニングが血圧およびカテコールアミンに与える影響」（黒部，黄，小澤，西脇，荻田，第 22 回日本トレーニング科学会大会，2009）

6)「運動トレーニングに伴う動脈スティフネス低下が最大下運動時の血圧応答に与える影響」（西脇，黒部，齋藤，田巻，福岡，荻田，第 64 回日本体力医学会大会，2009)

7)「低圧トレーニングが内臓脂肪、血中アディポネクチン濃度および動脈スティフネスに与える影響」（西脇，荻田，九州体育・スポーツ学会第 58 回大会，2009）

8)「Effects of high-intensity training under hypobaric hypoxic conditions on metabolic capacity and exercise performance.」（Ogita,F.，2009 China Duoba International Forum on Altitude Training and Health，2009）

9)「高齢女性における日常身体活動の酸素摂取量と加速度計を用いた下肢筋の活動水準推定」（島田，吉武，図子，西牟田 斎藤，日本生理人類学雑誌，14(1)，pp.7～13，2009）

10)「Quality of life and physical fitness in an 85-year-old population.」(Takata Y, Ansai T Soh I, Yoshitake Y, et.al., Archives of Gerontology and Geriatrics., online available,2010)

11)「The physical function is associated weakly with angiotensin converting enzyme gene I/D polymorphism in elderly Japanese subjects.」（Yoshihara A, Tobina T, Yamaga T, Ayabe M, Yoshitake Y, et. al., Gerontology. 55(4) pp.387～392, 2009)

12)「地方都市在住高齢者における日常生活での歩数と体力との関係」（永山，木村，島田，中川，西牟田，大橋，宮崎，濱岡，吉武，体力科学，57(1)，pp.151-162，2008）

13)「Physical fitness and cognitive function in an 85-year-old community-dwelling population.」（Takata Y, Ansai T, Soh I, Kimura Y, Yoshitake Y., et.al.，Gerontplogy,54(6)pp.54-60，2008）

14)「地域在宅高齢者における「閉じこもり」と身体活動状況および体力」（恒吉，永山，涌井，浜岡，斉藤，図子，井上，和田，隅野，荻田，吉武，体力科学，57(4)pp.433-442，2008）

15)「傷害を伴う転倒未経験の地域在住高齢者における転倒発生と体力および身体的要因との関連」（畑山，長野，畝，吉武，木村，百瀬，甲斐，諏訪，熊谷，体力科学，57(4)，pp.503-510，2008）

３．青少年の心身の健全な発達に資する一貫指導システムの研究・開発として、「高校自転車競技選手を対象とした３年間のトレーニングとその効果」(山本、荒木、スポーツトレーニング科学 11(2010))や、「中学生期におけるサッカーの競技力向上を目指したトレーニングの実践」(堂脇,金高,山本、スポーツトレーニング科学 11(2010))等、小中高の研究協力校と共同研究を行い、科学的トレーニング法を成長期の青少年に応用し顕著な成果を上げた事例を導き出している。またスポーツリフレッシュセミナーを開催し、学校体育指導者に科学的トレーニング法を教育することで学校体育の充実へ寄与した。

【関連する研究成果】

1)「「小学校・体育における身長を手がかりにしたハードル走の設定条件の検討」（金高，瀬戸口，鹿屋体育大学学術研究紀要，38， pp.45-54，2009）

2)「児童のたくましく，生きる力を育むためのけが・危険回避ができる運動指導に関する研究−小学校教員が運動指導で経験したけが・ヒヤリハット事例の検討−」（天羽，金高，瀬田，スポーツトレーニング科学，10，pp.50-56，2009/03）

3)「高校自転車競技選手を対象とした３年間のトレーニングとその効果」（荒木，山本，スポーツトレーニング科学，11，pp. 25-29，2010/3）

4)「中学生期におけるサッカーの競技力向上を目指したトレーニングの実践」（堂脇，金高，山本，スポーツトレーニング科学，11，pp. 30-38，2010/3）

5)「中学生期の体力トレーニングにおける効果とポジションの適性について」（吉村，西薗，スポーツトレーニング科学，11，pp. 39-41，2010/3）
6)「高校生期における女子柔道選手のトレーニングに関する研究－高校柔道日本一を達成できる選手の育成を目指して」（吉村，スポーツトレーニング科学，11，pp. 42-43，2010/3）

資料 2-2

知的財産体制の構築に向けて、平成 20 年度及び平成 21 年度において整備した知的財産関連規程等

規程等	備考
鹿屋体育大学知的財産ポリシー	［平成 21 年 1 月 8 日：制定］
鹿屋体育大学知的財産規則	平成 18 年 規則第 27 号 ［平成 21 年 1 月 8 日：改正］
鹿屋体育大学知的財産取扱規程	平成 18 年 規程第 14 号 ［平成 21 年 1 月 8 日：全面改正］
鹿屋体育大学における職務発明等に対する実施補償金及び実施報奨金の算定に関する取扱要項	［平成 21 年 6 月 24 日：制定］
鹿屋体育大学登録商標の管理及び使用に関する細則	平成 21 年細則第 8 号 ［平成 21 年 10 月 1 日：制定］
鹿屋体育大学登録商標の管理及び使用に関する申合せ	［平成 21 年 10 月 1 日：制定］
鹿屋体育大学知的財産アドバイザー設置要項	［平成 22 年 3 月 23 日：制定］

資料 2-3-1

知的財産セミナー実施状況について

年度	テーマ	講師	対象	参加人数	備考
16	知的財産権とは ～研究成果を有効活用するために～	鹿児島TLO 技術移転マネージャー 吹留博実氏 特許流通アドバイザー 平川康人氏	教職員	25名	
17	知的財産はなぜ必要か～教育と知的財産～	宮崎大学客員教授 石川正樹氏	教職員・学生	38名	九州経済産業局
	体育・スポーツ分野における知的財産権の実例 ～知的財産の創造と権利の活用～	弁理士 東和博氏	教職員	23名	九州経済産業局
18	(1部)特許とは？知的財産権とは？ (2部)あなたも出願してみましょう ～事前調査から明細書作成まで～	弁理士 東和博氏	教職員・学生	(1部)25名 (2部)13名	九州経済産業局
	体育系大学におけるベンチャービジネス設立の意義について	筑波大学人間総合科学研究科教授 高 松 薫氏	教職員・学生	22名	九州経済産業局
19	NIFS-K 知的財産管理体制構築セミナー	産業医科大学 産学連携・知的財産本部 大学知的財産アドバイザー 特任教授 田中義行氏	教職員	7名	独立行政法人 工業所有権 情報・研修館
	職員・研究員・学生と知的財産の関り ～鹿児島大学の事例を参考に～	鹿児島大学 産学連携推進機構 知的財産部門 特任教授 金崎 雄三郎氏	教職員・学生	29名	九州経済産業局
20	ミズノの知的財産の創出、知的財産から生まれたミズノの製品、企業が大学に望むこと	ミズノ株式会社 法務部 知的財産課 主幹 仲谷寛男氏	教職員・学生	51名	九州経済産業局
21	ナイキのブランドの起源と発展における知的財産の創出、保護、活用について	株式会社ナイキジャパン 法務部 マネージャー 前田紀子氏	教職員・学生	35名	九州経済産業局

資料 2-3-2

鹿屋体育大学における職務発明等に対する実施補償金及び実施報奨金の算定に関する取扱要項

平成２１年６月２４日
学　長　裁　定

（目的）
第１　この要項は、鹿屋体育大学知的財産取扱規程（平成２１年規程第１号。以下「取扱規程」という。）第２１条第２項及び第２２条第２項の規定に基づき、実施補償金及び実施報奨金（以下「実施補償金等」という。）の算定に関する事項を定める。

（用語の定義）
第２　この要項における用語の定義は、取扱規程における用語の定義に従うほか、次の各号に定めるところによる。
(1)「本学が得た収入」とは、当該知的財産権の実施等により、本学が得た収入をいう。
(2)「必要経費」とは、当該知的財産権に係る出願、維持、管理及び技術移転に要した経費をいう。

（実施補償金等の算定）
第３　実施補償金等の算定は、事業年度（４月１日から翌年３月３１日まで）毎に行う。
２　学長は、各事業年度終了日における本学が得た収入の累計額が必要経費の累計額を上回った場合に、当該発明者に対し、実施補償金等を支払う。ただし、実施補償金等の算定額が千円未満の場合は、次年度以降に繰り越すことができる。
３　実施補償金等の額は、次の算式により算出された金額とする。
実施補償金等の額＝（本学が得た収入の累計額－必要経費の累計額）×50/100
４　実施補償金等が支払われた次年度は、新たに本学が得た収入及び必要経費の累計額をもって、実施補償金等を算定する。

（雑　則）
第４　この要項に定めるもののほか、実施補償金等の支払いに関し、必要な事項は別に定める。

附　則
この要項は、平成２１年６月２４日から施行する。

資料 3-1

産学官連携活動実績（平成 20・21 年度）

○平成２０年度

- ＲＥＮＫＥＩ（冊子）の発行
- 第７回産学官連携推進会議（京都）に出展
- 南九州発新技術説明会（東京）に出展及び発表
- 講演会「これからどうなる？最新エネルギー・環境事情」を開催
- 産学連携に関する講演会を開催
- 受託研究及び共同研究取扱規程の見直しを検討
- 受託研究や共同研究の前段階としての活動として新たに「学術指導」の仕組みを設けて企業と契約を締結

○平成２１年度

- 第８回産学官連携推進会議（京都）に出展
- 異業種交流会（鹿屋市）に出展
- 南九州発新技術説明会（東京）に出展及び発表［本学が当番校］
- 「学術指導」について企業と契約を締結
- 受託研究及び共同研究取扱規程の全面改正

本学ホームページ掲載部分：URL　http://www.nifs-k.ac.jp/property/

資料 3-2-1
スポーツ情報データベース

資料 3-2-2

資料 3-2-3